女たちの招魂祭

八木柊一郎

登場人物

老婆
（六十九歳の老婆・二十二歳の踊り子・二十九歳の芸者）
中年の夫
中年の妻
若い夫
若い妻
踊り子１
〃　２
〃　３
〃　４
芸者くり子
芸者文香
海軍中尉
若い男
老人

闇の中から、ひとりの老婆、こちらに向かって歩いてくる。止まる。老婆は、口をひらかずにそこに立ちつくすかも知れない。そうしてもよい。だが、やはり老婆は、口をひらく。口調は登場の仕方の割には透明である。

老婆　……わたくし、六十九（ろくじうく）になります。

老婆、かすかに動く。

老婆　明治四十三年に、わたくし生れまして、世はすぐに大正となり、その大正が昭和に変わって五年目、十九のときに私生児をひとり生みました。生み落してそのまま親にあずけ、以後一度も会っておりません。今も、会える身ではございませんが、むしろ会ってはならない間柄でございますが、……わたくし、むこうから招（よ）ばれているような、招かれているような……そんな気がいたしまして。これは私自身への云いわけかも知れませぬが、ひょっとしたら本当に招ばれているのかも知れず、それをたしかめるためにも、会いに行かずばと、五十年ぶりに、わが子の顔を見に行く所存でございます。……多分たいへんに迷惑な話だと思います。それに、私をよんでいるのはわが子の魂ではなくて、縁もゆかりもないひとの声かも知れず、その点からもわが子には災難だと思うのですが……。わたくし、どうにもたまらず、招ばれて行きたい……。あのうちへ。……わたくしが生んだ子は、男の子でございました。今はひとなみに家庭を

もち、ひとつかふたつ上の奥さんと、一人の息子と、そのお嫁さんとの四人で、しあわせな、そして中流の、暮らしをしているそうでございます。

老婆、姿は一旦消えて行き、平和な、そして中流の家庭があらわれる。夕食が終ったあとらしい。

中年の妻が居間にくる。

中年の夫とその息子である若い夫は、すでに居間に坐っている。

中年の妻　あら……。（果物をテーブルに置きながら）カズ子さんは？

若い夫　さあ……

中年の夫　……今日のスープ。

中年の妻　おいしかった？

中年の夫　……うん。

中年の妻　そうでしょう。

若い夫　固形スープじゃなかったの？

中年の妻　ほんとのコンソメよ。

若い夫　へえ……。

中年の夫　でもちょっとにごってたな。ほんとのコンソメはもうすこし澄んでないとね。

中年の妻　味がよければいいじゃないの。

中年の夫　そりゃいいけど。
中年の妻　四日間煮こんだのよ。筋肉（すじ）に野菜にいろんな香料。
若い夫　二週間はかけなきゃ。
中年の夫　いや、二ヶ月かけるっていうぜ、ほんものは。
中年の妻　時間をかけりゃいいってもんじゃないのよ。とろとろ煮こんでいる間の注意力や根気が平均してつづかなきゃ。投げやりに一ヵ月煮こむより、ていねいに四日か五日。その方が結果がいいって、ちゃんと吉川さんが本に書いてるんだから。
中年の夫　誰だい、吉川さんって。
中年の妻　ホテル・ニューグランドのコック長。

三人、ちょっと沈黙。
若い夫が、目的もなく席を立つ。

若い夫　何してるのかな、あいつ。
中年の妻　喧嘩でもしたの？
若い夫　なんで……。
中年の妻　御飯のとき、口をきかなかったじゃないの。
若い夫　そうかな。口をきいたよ。
中年の妻　おソースをとって。それだけだったわ。ひとことだけ。

若い夫　観察するのはいい加減にやめてよ。いやらしいなあ。
中年の妻　観察してるわけじゃないわよ。
若い夫　口数がもともと少ないほうなんだからいいじゃないの。
中年の妻　悪いとは云ってませんよ。
中年の夫　あの子、口数が少ないかね。おれはそうは思わないけどね。
中年の妻　またあの子だなんて。ちゃんと名前を云ったら。恥ずかしいの？
中年の夫　何が……。
若い夫　ねえ。（声を低めて）おれ、結婚、ちょっと早すぎたかな。
中年の妻　……自分ではどう思ってるの。
中年の夫　しちまったものはもうしようがないだろ。
若い夫　そりゃそうだけど。
中年の妻　変な云い方するわね。しちまったものはしようがないなんて。そう思ってるのかな、あなたって。
中年の夫　自分のことを云ったんじゃないよ。こいつの……
中年の妻　それはわかってますよ。この子は結婚してまだ半年よ。しちまったものはしようがないなんて、いきなりそんな云い方することはないと思うけど。
中年の夫　いきなり云ったわけじゃないだろ。こいつが後悔がましいことを云うから……。
中年の妻　後悔なんかしてないったら。満足そのものって顔してるわよ。
中年の夫　ならいいじゃないか。

中年の妻　さあ、果物、果物を召し上がれ、お二人とも。

若い妻が居間にくる。三人、同時に振り向く。

中年の妻　伊予柑、食べない？

若い妻　どうも……。（近づくが、テーブルから離れて突立っている）

中年の妻　どうしたの。

若い妻　あの……、ちょっと失礼します。（服を脱ぎはじめる）

若い夫　（うろたえて）おい……

若い妻、あっという間に自分で服を剝ぎとり、踊りの稽古着姿になって、ラジカセのボタンを押し、ポーズをとる。

若い夫　（照れかくしに）へえ……。今までのレッスンの成果を、みんなの前で見せようっていうの？　小学生なみのことしてくれるじゃないの。

若い妻　（基本動作をはじめながら）ご相談、っていうと皆さん固くなると思って。……といって自信たっぷりみたいに思われても困るんだけど……、ねえヨシオさん。お父さん、お母さん。要するに私、決心したわけ。これに……、踊りに……、本式に打ちこむって。

若い夫　冗談じゃないよ。今からいくら打ちこんだって本式も略式もないだろ。

若い妻　あるわよ。本式にやるってことと、一週一回のレッスンで自分の心の底の情熱をなだめてごまかすってことは、本質的にちがうわ。踊りで身を立てるつもりはないけど、生きているあかしにすることはできるって感じてたの。

若い夫　へへへ。生きているあかし？

若い妻　あなたも何か探しなさいよ。

若い夫　ごめんだね。

若い妻　結構趣味が多いじゃないの。切り絵とかスキーとか、パチンコとか。パチンコでも本式に打ちこめば……

若い夫　あのね、踊りのレッスンをふやすのは勝手だけどね、生きているあかしだなんて本気で云ってもらっちゃあ迷惑なんだよな。だいいち、勤めはどうするんだい。五年間は共稼ぎって約束だろ。

若い妻　勤めなんて、もちろんやめるわよ。

若い夫　やめる？

若い妻　ええ。

若い夫　ねえ。何でそんな急に、何で踊りなんかに打ちこまなきゃならないんだよ、え？

若い妻　何でって……、それがはじめからわかってれば苦労しないわよ。何で打ちこみたいのか、それを確かめたいから打ちこむのよ。

若い夫　確かめられなかったらどうするんだい。

若い妻　そんなこと今からわかりっこないじゃないの。

若い夫　……ねえ。二階へ行って話そうよ。おれときみの問題だよ、これは。

中年の妻　ちょっと待って。……カズコさん。いきなり結論を云うようだけど、本式に踊りに打ちこむなんて、私は反対だわね。そりゃ、あなたがとても踊りが好きだってことは知ってるわよ。美容体操の代りにもなるし、一週一回のレッスンは大賛成よ。でも、何もかもほっぽって今から踊りを本式に勉強するなんて、ちょっと気ちがいじみてやしない？

中年の夫　気ちがいじみてるって云い方はちょっと……。

中年の妻　あなたは賛成なんですか、カズ子さんが踊りに打ち込むことに。

中年の夫　賛成ってわけじゃないが、べつに反対はしないな。

中年の妻　じゃあ、賛成ってことじゃないですか。

中年の夫　すこしちがうよ。

中年の妻　あなたが反対しなくても、ヨシオが反対だったら、カズ子さんはやはり考えるべきだと私は思いますけどね。

若い夫　だからさ、これはぼくとカズ子の問題だから……

若い妻　二人っきりで話しても同じよ。……私、もう決心したって云ったでしょ。

若い夫　……ぼくが、あくまで反対したら、ひとりになっても踊りをやるってことかい。

中年の妻　そんな……

若い妻　あなたはどうなの？　私がいうことをきかなかったら、私と別れる？

中年の妻　カズ子さん。

若い妻　といって私、あなたがそこまではしないと思ってわがままを云ってるんじゃないのよ。わがままではないのよ。そこをわかってほしい。

中年の妻　わがままではないとしたら、いったい、どういうこと？　あなたってむかしから踊り手になりたかったの？　それが今、急に噴き出したの？

若い妻　踊り手になりたいっていうのとはちがうんです。職業として考えているわけではないの。

中年の妻　では、遊びとして？

若い妻　遊び……。そうかも知れません。

若い夫　芸術、って云いたいのかなほんとは。

若い妻　うーん、ちがう。芸術って言葉は嫌いよ。

若い夫　いったい誰にどんな踊りを本式に習いたいっていうのかね。プロの踊り手になるのが目的ならともかく、遊びとして本式にやるなんて、どっからそういう気持が起るのか全然わかんないね。気まぐれだよ、そんな気持は。気まぐれとしか云えないね。

若い妻　（泣きそうな声で）ちがう。気まぐれじゃない。気まぐれとしたら、私の体の中に住んでる、何かの生きものの、そのひとの気まぐれなんだわ。私、そのひとの気持のままにするほかない。誰が何と云っても私、踊りのレッスンにこれからは、夢中になるほかない……。そうよ。夢中になるの。踊りに夢中に……。

三人、だまりこみ、若い妻は踊りつづける。

中年の妻　……あなた。……これでいいんですか。

中年の夫　これでいいって……

中年の妻　何とか云って下さいよ、カズ子さんに。
中年の夫　……（若い妻に）夢中になるのはいいが、あんまり夢中になりすぎると、ちょっとね。
中年の妻　ああ……、もう……
若い夫　来いよ、カズ子。二人で話そう。
若い妻　いや。
若い夫　……

このとき、玄関のチャイムが鳴る。

中年の妻　（立ちながら）おとなりかしら。回覧板をいつも夜になってもってくるんだから。（玄関へ消える）

カズコ、服を着る。
それを二人の男はだまって見ている。

中年の妻　（戻ってきて）あなた。（だまりこむ）
中年の夫　……どうしたんだい。
中年の妻　……あなたの、母親だっていうの。
中年の夫　え？

中年の妻　変なおばあさんが。
中年の夫　……。
中年の妻　どうしたらいい？（声を低め頭をさして）おかしいのよきっと。
若い夫　何でうちへ入ってきたのかな。
中年の夫　……おれの、母親だって？
中年の妻　ええ。主人の母は、八年前にもうなくなっていますけどって云ったら、それはご主人の母親じゃなくて私の母親だっていうの。
中年の夫　私のって、そのおばあさんの？
中年の妻　ええ。
中年の夫　……。
中年の妻　ねえ。あなた出て下さいよ。

そこへ老婆がそっとあらわれる。
若い妻が小さく声をあげる。

老婆　……おじゃまします。

家族四人は抵抗しがたい。

老婆　昭一郎。……こんにちは。私が、私があなたの、お母さんよ。
中年の夫　……。
老婆　ほんとに突然でごめんなさいね。……あなた、私を招んだでしょう？　だから来たの。……奥さん、失礼します。（坐る）
中年の妻　おばあさん。……あなた。私いやよ、こんな……。何とかして下さいよこのひと。
老婆　（やわらかく）何が、何がおいやなの？
中年の妻　……。
老婆　五十年前に、いなかへ帰って私、この子を生んだの。秘密の子でね。なぜってその頃私、松竹歌劇団の生徒で……、踊りに夢中で、子供などとても、
若い妻　ああ……。
若い夫　カズ子……。
老婆　ほんとうなら、踊りをやめなければいけなかったの。でも、どうしてもつづけたくて、
中年の妻　おばあさん。おねがいですからもう。
老婆　すみません。昔話はやめますわ。……ねえ、昭一郎。私ね、いなかの母から昭一郎はうちの子として籍に入れましたって、あとで知らせをうけたの。母はそのとき三十八、まだ子供を生んでもおかしくはない年頃だったし……。そのこと母はあなたに打ち明けたかしら。……本当の母親はべつにいるって。……死ぬときには、そういうことって必ず打ち明けるものだけど……。
中年の夫　……
中年の妻　本当なの？　……そうだったの？

中年の夫　……うむ。……実は、そうなんだ。
中年の妻　まあ……。（絶句する）
若い夫　へえ……そう……。（感心したように父親を見る）
老婆　（笑って）ごめんね昭一郎。私はね、あなたをじゃまにしたわけではないの。自分で育てるより両親にあずけたほうがあなたのためだと思ってそうしたの。私、どうしても歌劇団に戻りたかった……、踊りをつづけたかったのよ。ねえ、わかってちょうだい。
若い妻　わかります。
老婆　ありがと。
中年の妻　カズ子さん。
老婆　でもね、その頃の歌劇団は待遇がそりゃ悪くてねえ。みんな寮に入ってるんだけど、その寮が南京虫と虱でもう……、サラリーだってただ同然。それでどうしたと思う？　私たち、ストライキをはじめたの。水の江滝子さんがリーダーでね、湯ヶ原の宿屋に籠城して、そりゃあ……。
中年の妻　あの……、
老婆　すみません。かいつまんで申し上げますね。そんなわけで昭和十二年に国際劇場が浅草にできた時には歌劇団にはわたくしもういなかったんです。同じ浅草で芸者になって……。それが芸者もねえ、毎晩のように泊まりをとっても前借がたまるばっかりで、割りが合わないの何のって……、そこへちょうど戦争が烈しくなって、とても条件がよかったもんですからね、軍隊の求めに応じて島へ、南洋の島へ行ったんです。お商売をしに。
中年の夫　……。（ぎくりとする）

老婆　いえ、私はね、将校さん専門だったから、とても楽だったのよ。今思うとあの頃が花だったかも。
中年の妻　ちょっとお待ちになって。
老婆　何ですか？
中年の妻　主人の母が、本当は祖母で、本当の母親はほかにいるということが本当だとしても、あなたがそのひとだという証拠は、
老婆　証拠？
中年の妻　ええ。
老婆　何をおっしゃるんですか。私がここへ来たのは、昭一郎の母親だからですよ。ここへ来たということが、すなわち証拠ですよ。
中年の妻　……（夫に）あなた。……何とか云って。
中年の夫　……私の母は、つまり祖母は、本当の母親の生死はわからないと云っていました。松竹歌劇団にいたということも、きいていないんですが。
老婆　昭一郎。……私が、あなたの生みの母でなかったら、どうしてこのうちにあらわれますか。（いきなり手を握って）……私はね、あなたに招ばれてここへ来たの。あなたに。
中年の妻　主人は、誰も招びはしません。
老婆　（若い夫を見て）ヨシオ。あなたも招んだわ。
若い夫　ぼくが⁉
老婆　ええ。（若い妻に）カズ子さん。あなたも。
若い妻　……私が、

老婆　ええ。
若い妻　私や、ヨシオさんの名前を、ご存知なんですね。
老婆　ええ。知っていますとも。
中年の妻　そんなものは住民票を一枚とればわかります。……おばあさん。もし、もしですよ、あなたが本当にこのひとのお母さんでしたら、私どもそれなりのことは致しますから、ちゃんと順序をふんで、私たちの納得のゆくようにしてくださいませんか。
老婆　順序をふんで……納得のゆくように。
中年の妻　ええ。
老婆　何を、納得させるというの？
中年の妻　ですから、あなたがうちの主人の母親だという、そのことをですよ。
老婆　……（だまりこむ）
中年の妻　（夫に）あなた。このひとは迷い子なのよ。迷い子のおばあさんなのよ。警察に届けましょう。
中年の夫　しかし。
老婆　奥さん。ご迷惑は重々承知しています。でもね、もう、はじまっているんです。
中年の妻　何が、何がはじまっているんですか。
老婆　お祭り。……私、自分で自分を、お祭りしたいの。私が祭られるお社は、ここ、このうちなんですよ。……出直してきます。それまでに、私をおさめる場所を、ご家族一同、ご相談して、とりきめておいてください。ね？　……ごめんなさいね。どうにもたまらず、私、来たかったの。……では、出直してきます。

老婆、去って行く。
中年の妻、老婆が去ったあと、気をとり直して玄関の方へ行き、老婆が家を出たことをたしかめて戻ってくる。その間三人は無言。中年の妻、戻ってくる。

中年の妻　……あなた。あなたはあのひと、本当の母親だと思うの？
中年の夫　（あいまいに）いや……
中年の妻　……もしそうだとしても、うちへひきとる義理はないわ。……そうでしょう。そうだと、はっきり云って。……大事な問題よあなた。
中年の夫　……うん。
中年の妻　……それにしても、死んだお母さんが、あなたの本当のお母さんじゃないってこと、どうして私に話してくれなかったの。……私にだまっている必要もないと思うけど。……ヨシオだってカズ子さんだって、何だか、薄気味悪くなるじゃありませんか。ねえ？
若い夫　また来たら……、どうするの？
中年の妻　（夫に）どうするんですか。
中年の夫　……自分で自分をお祭りするって、どういうことだろう。
中年の妻　……
若い妻　私は……、私はあのおばあさん、おとうさんの本当のお母さんだと、そう思うわ。……だから、やさしくしてあげなければ。そう思うわ。

若い夫　松竹歌劇団にいたからって……
若い妻　だからじゃないわよ。
中年の妻　踊り子、芸者、それに、軍隊の……。南洋での商売っていうのは、慰安婦のことよ、従軍慰安婦。
中年の夫　（どなって）トキエ！
中年の妻　……おどろいたわね。あなたがそんな風に私にどなったこと、はじめて。結婚して二十五年以上たつのに、はじめて。
若い妻　……慰安婦って、なあに？
若い夫　つまり……、兵隊相手の……
中年の妻　……嘘かも知れないわ。（混乱し、興奮してくる）踊り子も芸者も慰安婦も、みんな嘘かも知れない。どんなことをしてきても、母親は母親だってそう云いたいんだわねきっと。いやねえ、血のつながりって。大嫌い、あたし。
中年の夫　血のつながりが大嫌い？
中年の妻　ええ。
中年の夫　そんなこと云っていいのか？　ヨシオの母親はおまえだろう。血がつながってる母親だろう。
中年の妻　……あなた。あなたはやっぱりもう、あのひとを母親だときめてるんですか。そうして私とヨシオの間柄と、あなたとあのおばあさんの間柄は、同じだって、そういうんですか？
中年の夫　だから、それはまだ。
中年の妻　冗談じゃないわよ。あのおばあさんのいうことが本当だとしても、あのおばあさんは赤ン坊のあ

なたを親におしつけて、自分はしたい放題のことをして、五十年も子供のことを放っておいたのよ。そんなのはもう、親子とはいえないでしょう。血のつながりだけよ。それがいやだっていうのよ私は。

若い妻　でも親子は親子だわ。

中年の妻　カズ子さん。ひとごとのように云わないでちょうだい。……ヨシオ。あなたにはわかるでしょう。あのおばあさんがお父さんの母親だとしても、お父さんとあのおばあさんの関係と、私とあなたの関係は全然ちがう。ちがうでしょう。

若い夫　そりゃあ、ちがうと思うけど、状況がちがうだけで、本質は同じかも。

中年の妻　本質って、なによ。

若い夫　親と子だっていうこと。

中年の妻　それは……そっちのほうがむしろ状況よ。本質は……本質は……あなたをここまで育てた二十五年の月日のなかにあるはずだわ。這い這いから、よちよち歩き、幼稚園、小学校、中学、高校、大学……どんなに毎日こまごまと、いろんな苦労や心配や……（泣き声になって）そういうものをいったい何だと思ってるのかしら。そういうものこそ本質よ。母親と子供の間の本質よ。あのおばあさんは、生んだだけじゃないの。生んだだけでは母親とはいえないわ。

若い夫　母さん。そんなに興奮することないじゃないか。

中年の妻　どうして⁉……あんたはあのひとがもう来ないと思ってるの？　来るわよ。きっとまた押しかけてくるわよ。

若い夫　来るとしても、あのひとは唯、自分の身の上話をしたいだけだと思うよ。このうちに住みつくなんて感じじゃなかったよ。（若い妻に）なあ？

若い妻　……住みつくというより、もっと。
中年の妻　そうよ。何を要求するかわかったもんじゃないわ。……あなた。はっきり云ってちょうだい。あのひとがまた来ても、うちにいれないって。絶対にいれないって、約束して。
中年の夫　……
中年の妻　いれるつもりなの？　また会うつもりなの？
中年の夫　……
中年の妻　あなた、腹が立たないの？　いきなり、あんな……。本当の母親だとしたら、むしろ他人以上に腹が立ってしようがないはずよ。そうじゃない？　……私、だんだん予感がしてきたわ。あのおばあさんに対して決然たる態度をとらなかったら、このうちはきっとめちゃめちゃになる……。いやよ私。それだけは絶対にいや。……あなたがはっきり態度をきめられないんでしたら、私が決めます。……いいのね？
中年の夫　……
中年の妻　どうなの……。
若い夫　とにかく、あのひとが父さんのほんとの母親かどうか、それをちゃんと調べてから……
中年の妻　お父さんのほんとの母親がどこかに生きているとしたら、あのひとがほんとかどうかに関係なく、私たちはこの際根本的態度をきめておく必要があるのよ。あのひとを退散させても、またたちがうひとが押しかけてくるかも知れないし、にせの母親でもほんとの母親でも一切ごめんこうむるってことを私たち四人の間で気持を統一しておかなければ、このうちの平和はもう保てないんだから。絶対にそうなんだから。
若い妻　どうして？

中年の妻　……カズ子さん。さっきのことだけど、踊りを本式にやるなんて、やっぱり無理だと思うわ私。
……今まで通りレッスンは一週一回、いえ、二回にふやしてもいいから……それでどう？
若い妻　レッスンは、これから毎日うけます。
中年の妻　……ヨシオ。
若い夫　二階へ行って話そう。
中年の妻　ここで云いなさい。
若い夫　母さんには関係ないだろ。
中年の妻　どうして！
若い夫　経済的な理由で今は一緒に住んでるけど、ぼくとカズ子はこれでも独立した生活単位だからね。カズ子が一週に何回踊りを習いに行くかってことは、ぼくとカズ子でもってきめるよ。
若い妻　もうきまってるのよ、毎日習いに行くって。
若い夫　……じゃあ、そうするんだね。
若い妻　ええ。そうします。
中年の妻　ヨシオ。あんた、それでいいの？
若い夫　ああ。
中年の妻　カズ子さんは、踊りを生きているあかしにするんだって、はっきり云ってるのよ。
若い夫　……それが本当なら、みとめるほかないね。こっちも何か……、といってもそう簡単にはいかないけど、何とか、そのうちに。
若い妻　ありがと。それでこそヨシオさんだわ。

中年の妻　生きているあかしが、そう簡単につかめてたまるもんですか。母さんだってまだ……。いいえ、母さんは自分で、きめてるの。このうちが、今のこの暮らしが、生きているあかしだって。（夫を見つめて）あなたは、そう思ってはいないの？……あのひと、あなたに招ばれたんだって、そう云ってたわね。……あなたほんとに招んだの？　心の中で生みの母を呼んだの？

中年の夫　べつに、よびはしない。よびはしないが、……ずうっと。

中年の妻　気になっていたの？　ずうっと……。

中年の夫　……せめて、死んだということであれば……

中年の妻　もう死んでいてくれればいいって、そう思っていたのね。

中年の夫　……

中年の妻　そう思っても、あなたに罪はないわ。むしろそう思うのが当然よ。……わかったわ。あなたも私と同じ気持なのね。あんなおばあさん、関係ないのよね。

中年の夫　……

中年の妻　関係ないって、言葉に出して云ってしまいなさいよ。そうすればそういう気持になるわよ。……だいいち、あのひとがあなたのお母さんで、ほんとに従軍慰安婦なんかしていたんだったら……

中年の夫　（突然どなって）だったらどうなんだい。おれにどうしろっていうんだい。どう思えっていうんだよ！

中年の妻　……あなた。

若い妻　……おとうさん。

中年の夫　……関係ないって、言葉で云ったって、気持はその通りになるもんか。

中年の妻　……じゃあ、どうするの？　……あなたはもう信じてるの？　あのひとがほんとのお母さんで、
　そうして……
若い夫　これは、父さんと母さんの問題だ。ぼくとカズ子は関係ない。
中年の夫　なくはない！
中年の妻　あなた。
若い妻　……そうよ。おとうさんのいう通り。……私たちにも関係があるわ。……今だからいうけど、私、
　今朝から、何だか予感がしてたの。何かが起こりそうだって。
若い夫　いい加減なことをいうんじゃないよ。
若い妻　いい加減なことではないわ。だいいち、私が踊りを生きているあかしにしようと思い立ったのは、
　その前に何かを感じたからよ。体の中に、誰かが入ってきて、私にささやいたんだわ。こんな風ではだめ
　だよ、こんなことではすまないよ、って。
若い夫　きみは、神がかりの素質があるのか。知らなかったね全く。
若い妻　私だってほんとに思いがけなく……（ゆっくりとまた服を脱ぎはじめる）
若い夫　カズ子。
中年の妻　カズ子さん。

　若い妻、稽古着まで脱ごうとする。

若い夫　のぼせるんじゃないよ！（妻を腕づくで連れて出ようとする）

若い妻　さわらないで。……私は、あんたひとりのものじゃないわ。
若い夫　……カズ子。
中年の妻　何てことを云うのカズ子さん。

すでに音楽が鳴っている。
それとは別に、遠くから女の歌声がきこえてくる。五、六人の女の声である。
「会議は踊る」の主題歌〝命かけて唯一度〟（原語）

若い妻　誰かがやってくる。こっちへ来るわ。
中年の妻　誰が……、誰がやってくるの。

歌が終ると、玄関の方でガヤガヤ云う声がきこえる。

「ねえ、このうち空家（あきや）みたいよ。ここで相談しようよ」
「誰か住んでるんじゃない？」
「無人別荘よ。誰もいやしないわよ」
「とにかく入ってみようじゃない」

家族四人、何のリアクションも起し得ないうちに、どやどやと踊り子たちが入ってくる。踊り

子たちの〝時〟は昭和八年。初夏。てんでばらばらのふだん着。踊り子の一人は、まさしく若き老婆である。

老婆　ほうら、誰もいないじゃない。
踊り子１　ほんと。
踊り子２　でも空家にしちゃあ綺麗ねえ。
踊り子３　やっぱり誰か住んでるのよ。ちょっと留守にしただけじゃない？
踊り子４　この夏みかん、新しいわよ。
老婆　伊予柑っていうのよこれは。
踊り子１　イヨカン？
踊り子２　では皆さん、お手を拝借。一致団結たたかい抜きましょう。イヨー、ハイ。

踊り子たち、たちまち息が合って、一本締めで手をしめ、笑い合って、自由にくつろぐ。家族四人は自然と隅に追いやられる。

中年の妻　このひとたち、いったい誰なの。カズ子さん。あんたが仕組んだの。
若い夫　そうなのかい!?
若い妻　いいえ。
中年の妻　（すすみ出て）ちょっと！　ここは空家じゃないのよ。出て行って。みんな出て行って。

踊り子４　（中年の妻の方を振り向くが、反応したわけではない）あ……、油虫。（こわがる）
中年の妻　何ですって⁉
踊り子４　ほら、あそこに。
中年の妻　……（思わず壁を見る）
踊り子１　何よ、油虫ぐらい。南京虫にくらべれば何でもないじゃない。
老婆　さあ。みんな集まって。
若い妻　おかあさん。（指さして）あのひと、あのおばあさんよ。年は若いけど確かにそうよ。
中年の妻　……
老婆　みつちゃん。お坐りなさいよ。
若い夫　そうだ。声が同じだ。
老婆　（踊り子の一人に）ねそべるんじゃないの！
中年の妻　（おびえながら）……冗談じゃないわよ。こんなことがあってたまるもんですか。（老婆のところへ行って）ちょっとあなた。（肩にさわって）あんた。
老婆　（反応しない）じゃ、戦術を考える前に、心をおちつけて。……いい？

踊り子たち、ハミングを始める。
（フォスターの“Old Folks at Home”）

中年の妻　（あらためて、つくづくと老婆を眺めたあと、夫のところへ戻る）……あなた。カズ子さんのい

う通りだわ。あのおばあさんにそっくり。……でも、そんなはずないわ。どういうことなの。これ。このひとたちみんな、何かの幽霊でもあるの？

中年の夫　……そうかも知れない。あるいは、おれたちが幽霊で、ここはほんとに空家なのかも……

中年の妻　……あなた。

若い妻　おかあさん。あのひとたちは私たちが見えないのよ。それだけのことよ。

中年の妻　……ああ、みんなして私を。……（耳をふさいでうずくまり）やめて。みんな帰って。かえって！（混乱のあまり泣き出す）

踊り子たち、ハミングからコーラスに移る。

踊り子たち　〜吹き捲く風は　かおを裂き
みるみる雪は　地にみちぬ
あわれ　すあしの　おさな子よ
別れし母を　呼ぼうらん

若い夫　別れし母を……（父親を見る）

中年の妻　……（顔を上げて、踊り子たちを見つめる）

老婆　……じゃ、私は委員長じゃないから演説はしないけど……。

踊り子２　ちょっと待って。争議委員長はいったい東京で何をしてるの。要求が通るまでは全員湯ヶ原に籠城ってきめたのは委員長じゃないの。

踊り子１　葬儀委員長は東京で香奠袋の中身を計算中であります。
老婆　みつちゃん！　シャレを云ってる場合じゃないでしょ。争議っていうのはね。ストライキっていうのはね、神聖なもんなのよ。おとむらいや結婚式よりずっと神聖なんだから。
踊り子２　神聖にして侵すべからず。
老婆　それは天皇陛下。
踊り子３　ねえねえ、天皇陛下って侵すべからずのくせに女を犯しているのは変だとは思わない？　ちゃんと子供をつくってるんだから。あれほんとは自分の子供じゃないのかしら。
老婆　ばかねえ。侵すべからずっていうのは私たちが天皇陛下を侵しちゃならないってことで、天皇陛下が誰かを犯しちゃいけないってことじゃないのよ。
踊り子３　あら、そうなの。
老婆　そうよ。
踊り子たち　ばかねえ、あんたって。
踊り子３　ごめん。
踊り子２　第一ね、侵すっていうのは、女を犯す犯さないだけじゃないってことぐらい知っていてほしいわね。
踊り子１　労働者の権利は神聖にして侵すべからず。
踊り子２　そうそう、そうよ。
踊り子３　でも私たちって労働者かしら。
踊り子２　きまってるじゃないの。踊り子だって労働者よ。資本家からサラリーもらって働いてれば、それ

すなわち労働者よ。資本家じゃないものは全部労働者よ。だから私たちだって革命をやる権利があるのよ。

踊り子３　カクメイ？

踊り子２　ええ。

踊り子３　なあに、カクメイって。

踊り子２　知らないのあんた。おまわりの前では絶対に云っちゃいけない、あれよ。

踊り子３　ああ。あのカクメイ？

踊り子４　私たち、革命をやるの？

踊り子２　やるわけじゃないけど、やる権利はあるって云ってるのよ。

踊り子１　革命より、とにかく待遇改善が先よ。南京虫としらみだらけの六畳に十三人も詰めこまれてさ、百五十人レビューガールがいるのに、ご不浄はふたつ、サラリーは十円。電車賃にも足りないって法がある？

踊り子４　会社は私たちが好きで踊りをやってると思ってるのよ。だから待遇のことなんて全然。

踊り子２　だから、こっちはこっちでさ。踊りを好きでやってるみたいに、ストライキも好きでやってるんだって居直ってやりゃいいのよ。つまりそうなりゃ、共産党とおんなじよ。カクメイよ。

踊り子１　でもカクメイって、この頃全然難かしくなってるんじゃない？　共産党の幹部だってみんなおりちゃってるんだから。

踊り子２　あんた、よく知ってるのね。

踊り子１　兄貴がマルクスボーイだったの。

踊り子２　へえ。
踊り子１　今は唯のボーイだけどね、ビヤホールの。
踊り子２　ふふふ……。
老婆　無駄口はやめなさいってば。私たちはそれこそマルクスボーイやエンゲルスガールじゃないんだから、理屈はどうでもいいのよ理屈は。
踊り子たち　わかりました！
老婆　今私たちが、考えなければいけないことは……。
踊り子３　考えなければいけないことは？
老婆　……それを、考えなければいけないのよ。
踊り子３　え……。
踊り子２　なあんだ。何か名案があるのかと思ったのに。
老婆　ちょっと待って。すこしわかってきたわ。私たちは電車賃に足りない給料でもしらみだらけになっても、とにかく舞台に立ちたい、踊りを踊っていたい……それは口惜しいけど本当よ。好きでやってると云われて、いいようにコキ使われても、しようがないところはあるわ。でもその代わり……？
踊り子２　その代り……？
老婆　……
踊り子３　わかった。
踊り子２　あんたはちょっと黙っててよ。
踊り子３　ううん、云わせてよ。多分今度は間違わないから。

踊り子１　ほんと？
踊り子３　ええ。……私たちは好きでレビューをやってるからいいようにコキ使われても文句は云わない、でもその代り、その代り、しょっ中ストライキみたいに、しょっ中カクメイみたいにレビューをやりたい。……っていうんじゃない？
老婆　そうよ！　そうなのよ！
踊り子１　あんた、勘はいいのね。
踊り子３　ええ。（はにかむ）
踊り子２　しょっ中ストライキみたいに
踊り子１　しょっ中カクメイみたいに
踊り子３　レビューを。
踊り子４　……すてき。
踊り子２　……でも、どうやればそうなるの。だいたいさ、ストライキっていうのは、やってることをやめることでしょ？　カクメイっていうのはぶちこわしでしょ？　やめて、ぶちこわすレビューって、どんなレビュー？
老婆　……わからないわ。……わからないけど……ストライキっていうのは、唯やってることをやめることではないでしょ？　……そうよ、一致団結。それにカクメイだって、唯のぶちこわしじゃないわ。つくるのよ、全く新しいものを。
踊り子２　それは支配人がしょっ中云ってることじゃないの。古いものをぶちこわして新しいレビューをつくれって。

老婆　支配人のいうのは言葉だけよ。本当は何にも信じちゃいないのよ。……ねえ、今度のストライキで私たち、シンからリズムが合ったと思わない？

踊り子３　ええ、それは思うわ。気持がぴったし合って、胸がわくわく。

老婆　それよ。そのわくわくで、レビューをつくるのよ。バンドのひとたちだってストライキをやってるんだし、振付の先生だって私たちを応援してくれてるんだから今なら気持が通じるわ。イキのいいわくわくがみんなの胸にあるうちに、ストライキのような、カクメイのようなレビューをつくりたいわ。

踊り子１　でも、そんなすてきなレビューができたら、お客がわんさわんさおしかけて、会社がもうかっちゃってしようがないんじゃない？　いいことにしてもうけを一人占めにしちゃうわよ、会社は。

老婆　そうなったらまたストライキをやるのよ。今度はもうお客がだまっていないから。レビューをみせろ、レビューがなくっちゃおれたち生きてはいられねえって、それこそお客が革命を起こして劇場へ押しかけてくるわよ。

踊り子３　そうなったらもうこっちのもんね。会社も私たちに降参して、楽屋だって一人一人みんな個室よ。電車賃が足りないどころか、運転手つきの自家用車で、

踊り子２　でも、どんなレビューよ、お客がそれなしに生きていけないレビューって。……そんなもの、ある？

一同沈黙。

老婆　……（ためいきをこめて）あるかどうか、わからないけど、私たち、舞台で踊るのを生きているあか

しと、きめたんですもの。そういうものがあるとして頑張るほかないじゃない……。

若い妻、思わずすすみ出る。

若い夫　（小声でとめる）カズ子……。
若い妻　そうよね。頑張るほかはないわ。
老婆　ねえ。……稽古をしようよ。秋の公演、タンゴ・ローザ。
若い妻　ええ。
踊り子たち　ええ。

音楽。（松竹レビュー、〝タンゴ・ローザ〟の主題曲）
踊り子たち、タンゴ・ローザの主題歌をうたい、そして踊りはじめる。若い妻も踊る。
踊り子たちは、歌いながら去って行く。
音楽が終り、我にかえった中年の妻が、若い妻にせまる。

中年の妻　カズ子さん。今のひとたち、やっぱりあなたが招んだのね。何でそんな手のこんだことをするの。
若い妻　……私、誰も招びはしません。でも、あのおばあさんのことは、もしかしたら自分でも知らないうちに招んだのかも知れません。

中年の妻　……あの、……おばあさん……
若い妻　おとうさん、あのひとは、あなたのお母さんです。
中年の妻　いいえ、ちがいます！
中年の夫　……
中年の妻　本当の母親だとおっしゃるんならその証拠を私に示してちょうだい。何年かかってもいいから、あなたの手で証拠を探して。それまでは私、あのひとのことは絶対に他人としてあつかいます。そうでしょうあなた。このままあんなひとをうちへ入れたら、このうちはもう、囲いも何もない広っぱとおんなじになってしまうわ。それでは私たちの暮らしが成り立たないじゃないの。そう思わないのあなた。
中年の夫　思うよ。思うけど、うちのなかといっても、いくぶんかはそとの部分があるんだし、第一、おれが会社へ行って働いてその労働によって、うちの経済が成り立っているということは、そとの広っぱとうちの中というのが密接につながっているということで。
中年の妻　労働、だなんて、あなたは労働者じゃないわ。
中年の夫　いや、そうだ。
中年の妻　会社はそとでも広っぱでもないわ。
中年の夫　いや、そうだ。そこがおまえにはわかってないんだ。会社っていうのはね、おれに給料をくれて、おれの家庭をしあわせに保つために存在してるわけじゃないんだぜ。その逆だ。会社のしあわせのためにおれがつくすから会社は給料をくれるんだよ。その給料で保証される家庭のしあわせなんて単なる結果にすぎんよ。おれは毎日、会社のためにつくすことと、家の中を明るくすることの矛盾の中で、そのはざまで、神経をすりへらしてるんだ。おまえはうちの中のしあわせしあわせっていうが、おれの神経がぷ

っつり切れちまったら、うちの中のしあわせなんていっぺんに吹きとぶんだぜ。というより、うちの中のしあわせなんて、もともとあるわけじゃないんだから。あるのは、なくてはならないのは、結局、会社のしあわせなんだ。

中年の妻　……私たちが今生きていられるのはあなたが会社で働いてくれてるおかげだということぐらい、ようく承知していますよ。でもね、うちの中のしあわせっていうのはあなた、お金だけで保てるわけではないわよ。……私には確信があるわ。もし私が、すこしでも明るくこのうちを維持して行こうという努力をあきらめたら、うちの中はばらばらになるわ。あなた方は、私がまるで空気を吸うように、自然に、楽に主婦をつとめて、毎日おさんどんをしているとでも思っているのかしら。私だって、これでも努力しているのよ。

中年の夫　それは、わかる。わかるが……

中年の妻　しあわせって、ほんのちょっとしたことから崩れて行くものよ、一旦崩れはじめたら、とめどもないのよ。……誰が何といっても、私はあのおばあさんのことは認めません。私にはわかるのよ。あのおばあさんは厄病神だわ。死神かも知れないわ。……私はこのうちのしあわせを、守ってみせます。ええ、守ってみせますとも。

若い夫　母さんって、すこし異常じゃないかな、しあわせ病患者だよ。

中年の妻　ヨシオ……。何てことを云うの。しあわせ病患者だなんて、何てことを云うの。

中年の夫　トキエ。

中年の妻　……あなたには、何にもわかってないのよ。二十五にもなるっていうのに。

若い夫　二十五年間、しあわせすぎたのかな。

中年の妻　そうよ。しあわせすぎたのよ。でもその二十五年のしあわせは天から降ってきたわけじゃないわ。
若い夫　母さんと父さんのおかげ。
中年の妻　いいえ。ちがう。
若い夫　急にまたご謙遜……
中年の妻　もうすこし、歴史の勉強をなさい！
若い夫　歴史？　……ああ、日本史の、現代ね。おれ、高校んとき世界史の単位しきゃとってなかったからね、てんで……。そうだ、あのおばあさんに習おうかな。
中年の妻　ヨシオ……。

この時、がらがらっという格子戸の音。
つづいて女の声がきこえる。

芸者くり子の声　今晩は。
老婆の声　あーら、いらっしゃい。
くり子の声　こんな時間にうかがって悪いけど、ちょっといいかしら。
老婆の声　どうぞ。
くり子の声　……あなた、お座敷は？
老婆の声　今夜はお茶っぴきよ。

くり子の声　そう。あたしもなのよ。（と、笑って）……このひとが、この間話した柏家の文香さん。
文香の声　文香です。よろしく。
老婆　綾菊です。さ、おあがりになって。
文香の声　おじゃまします。

老婆が芸者のくり子と文香を連れて登場。文香は島田に結い、老婆は、二十代の芸者のふだん着姿に変わっている。

老婆　どうぞ。散らかしてるけど。
くり子　おかみさんは留守？
老婆　そうなの。
くり子　ふふふ。ちょうどよかった。
老婆　（うなずく）

家族はまた自然に押しのけられて、呆然と見つめるばかり。

老婆　いい話って、やっぱり、満州？
くり子　そうじゃないのよ。満州行きより、ずっと条件がいいの。
老婆　満州より？

くり子　ええ。
老婆　どこなの、行き先は、
くり子　南洋の、
文香　トラック島なんです。
老婆　トラック島……
文香　ご存知かしら。
老婆　名前はきいたことはあるけど。
文香　その島に、海軍省直営の置き屋さんがあるんです。
老婆　すると、お客さんは海軍さんばっかりってわけね。
文香　そうなの。……支度金は、人によってちがうらしいんですけど、士官の係りになると、五千円も、
老婆　五千円？　ほんと⁉
文香　ええ。
老婆　五千円。夢のようなお金だわ。……もっとも、私みたいなケチな芸者でも、借金は四千円以上あるのよねえ。一生かかってももうきれいに出来っこない額だし、どうにでもなれと思ってこの頃は腰をすえちゃってるんだけど、借金から抜けるものなら抜けて、晴れて自前に、自由になりたい……。そう思わない日はないわ。
文香　じゃあ……
老婆　……でも、士官の係りって……、文香さん。はっきり云ってちょうだい。お商売は、芸者なの？　それとも……

文香　海軍の軍属のひとがいうには、書類上では、特殊看護婦っていうことになってるんですって。
老婆　特殊看護婦……。やっぱりそうだわ。……慰安婦ね。お女郎さんね。
くり子　綾ちゃん……、私もね、それでちょっと、
老婆　いいわよ。五千円くれるんなら、どこへでも行くわ。南洋の島なんて、いっそさっぱりしていいわ。
　芸者だってお女郎だって大したちがいはないもの。今だって、体を売らなきゃ帯一本買えないんだから。
　文香さん。……あたし、……おねがいしようかしら。
文香　そうお。
老婆　……くりちゃんも行くの？
くり子　ええ。そのつもりなの。
老婆　そう……。
文香　……トラック島って、まるで天国みたいにいいところなんですって。パパイヤやマンゴオや、おいしい果物がいっぱいあって、島の人は毎晩ヤシの木蔭で踊っているんですって。
老婆　……（うたう）赤道直下マーシャル群島、椰子の木蔭でテクテク踊る……。この歌、いつ頃から流行（はや）ってるのかしら。そういえば日本人って、ずいぶん昔から南洋へ進出してたのね。
文香　……そうそう、綾菊さんって、ＳＫＤにいらしたことあるんですって？
老婆　……
文香　くり子さんから聞きました。
老婆　……そんなこと、話さなくてもいいのに。
くり子　このひと、ターキーに夢中なのよ。それで……

文香　私、小学生の時からＳＫＤずうっと見てるんです。
老婆　そう。
文香　綾菊さん、あのレビューには出てらしたんですか。
老婆　あのレビューって？
文香　タンゴ・ローザ。
老婆　……
文香　あれはすてきだったわア。そのすこし前にストライキをやったでしょＳＫＤ。だからかしら。みんな最高に張り切ってたのね。
老婆　（暗然と）タンゴ・ローザには、私、出られなかったの。でも、舞台稽古まではいたのよ。……初日の前の日の、舞台稽古までは。
文香　……すみません、昔を思い出させて。
老婆　……スペインの踊り子になって、あの日、楽屋から袖へ行こうとしたら、支配人の山田さんに名前をよばれて、ふりかえると、鳥打帽の男が二人、立ってるの、刑事なのね、それが。……せめて稽古がすんでからって云ったら、いきなり横っつらをなぐられて、警察へ連れて行かれたわ。ストライキの時にカクメイの宣伝をしたろう、そのときのオルグを云え、誰にそそのかされたのか云えって、からだ中竹刀でぶたれて、そのまま五日間も……。カクメイの宣伝なんて致しません。カクメイのようにって、唯そう云っただけですっていうと、カクメイのようにとはどういうことだ、正直に具体的に云えって、しまいには、丸裸にされて、そうして、あそこに竹刀の先を……
くり子　綾ちゃん……

老婆　……劇場に戻ると、タンゴ・ローザの幕があいてて、私はクビになってた。奈落で本当に首を吊って死んでやろうかと思ったけど、死ぬんならあの特高の刑事を殺してからじゃなくちゃ死んでも死にきれないと思って……。何にも当てはなかったけど、下宿を探して、それからは夜になると、カクメイって声が頭の中にがんがん鳴りひびくの。スピーカーが何百も頭の中にあって、それがいっせいに、カクメイカクメイってどなるのよ。男に抱かれるときだけは、それが静まるの。だから私、毎晩のように……。男にはきこえるはずないのに、私があんまりおびえるんで、みんな気味悪がって逃げ出したわ。（耳をおさえてうずくまり）カクメイ、革命！　しまいには私、特高の刑事と同じくらいに革命を呪ったわ。夜、静かに眠れるんだったら、カクメイ派のひとを殺してもいいと思った……。それが……、そのカクメイの耳鳴りが、暮れの二十三日、東京中にサイレンが鳴りひびいた日に、ぴたっと消えたのよ。ほんとに消えたのよ。あんなうれしいことはなかった。頭が冴えて、その日の夕刊のトップ、いっぺんにおぼえて今でも……（朗読調で）大気晴朗天地ほのぼのと明けわたるあした、国をあげてお待ち申し上げていた慶祝の日は遂に来た。皇后陛下には二十三日午前六時三十九分、文字通り昇る朝日が静々と帝都のいらかに照り映えそめし時、めでたくもご安産遊ばされ、玉の如きすめらみこご誕生あらせられた。かしこくも御母子お二方には極めておすこやかにて、万世一系の皇位を継がせられるべき皇太子殿下のご誕生に大内山は瑞気あふれ、市内十八ヶ所のサイレンも高々と鳴りひびいて全国津々浦々はたちまちに奉祝気分をみなぎらせ、挙国慶祝の電波は満州国はじめ海の外へまで伝わった……。

くり子　私もあのサイレン、おぼえてる。でもそのすぐあとじゃなかった？　銀座会館の火事。

老婆　……そうよ。暮れもおしつまった十二月二十八日。

くり子　その頃私たち、カフェー銀座会館にいたの。お店が焼けたのをしおに、女給商売に見切りをつけ

て、綾ちゃんと一緒に浅草の置き屋さんに芸者にしてくださいってたのみに行ったのよね。
老婆　……あれから七年。くりちゃんに満州行きをずいぶんすすめられたけど。
くり子　ごめんね、いろいろ云って。でも今まで我慢していてよかったわ。だいいち、南洋は満州よりずっとあったかいもの。
老婆　でも、海軍省直営の置き屋なんて、ほんとにあるの？
文香　ええ。あるんです。身分も軍属扱いで、それに、まあそんなことはないと思うけど、もし現地で死んだら、軍人さん同様に靖国神社にまつられるんですって。
老婆　そう……。
くり子　トラック島は今、島中が海軍のものらしいわよ。戦艦や巡洋艦や潜水艦が、毎日何十隻と出入りしてるんですって。
老婆　……アメリカと戦争する準備じゃないの？　支那と三年もやってて、ちっともラチがあかないのに、アメリカとはじめたりしたらどうなるのかしら。
文香　海軍のひとが云ってたわ。アメリカと戦争になってもトラック島は絶対大丈夫なんですって。
くり子　アメリカとやっても、絶対に負けないわよ日本は。（声をひそめて）この間あたし、いなかへ帰ってきたんだけどね、海軍工廠へ行ってる兄貴にきいたの。絶対に秘密だから誰にもしゃべっちゃいけないって云われたんだけど……今年の五月に、一号艦っていう世界最大の戦艦が日本にできたんですって。
老婆　一号艦？
文香　変な名前。
くり子　正式の名前はまだ秘密なのよ。進水式もひっそりやって、海軍のえらいひとが、まるでメカケが子

供を生むようだって云ったんですって。
老婆　かくし子ってわけね。
くり子　そうなの。でもそれがすごいかくし子なのね。もしその一号艦が日本にあるってことがわかったら、外国はどこも日本に戦争なんかしかけてこないだろうって。
文香　へえ、たのもしいのねえ。
くり子　だって、それ一隻で出かけてっても、ヒリッピンとかジャワとかオーストラリヤとか、南の方は全部占領できちゃうっていうんですもの。
老婆　そう……。
くり子　大きさが、東京駅全体と同じなんですって。
文香　東京駅と？
くり子　ええ。乗組員が三千何百人で、台所なんかもう全部機械仕掛で、大根の千切りだっておいもの皮むきだって、ひき肉だってお茶だって、みんな自動的にできるようになってるんですって。
文香　三千何百人の食事をいっぺんにつくるんじゃ、機械仕掛でなくっちゃねえ。
くり子　とにかく、今までの長門や陸奥なんか、てんでくらべものにならない軍艦らしいわよ。
老婆
文香　……（うなずく）
中年の妻　ヤマトだわ。一号艦は、戦艦大和だわ！
若い妻　おかあさん……
老婆　すごいお金がかかるでしょうねえ。そんな軍艦つくるのって。

くり子　海軍は景気がいいのよ。
文香　そりゃそうよ。だから私たち一人一人に何千円も出して南洋へよぶのよ。
老婆　じゃあ、強くて景気のいい海軍さんに、よばれて行こうか？
文香　いざとなったら、一号艦が私たちを守ってくれるわ。
老婆　くりちゃん。決めたわ私。南洋へ行くわ。
くり子　私も。
文香　私も。新規まき直しよ！
老婆　そうね！

老婆、うたい出す。くり子と文香も調子を合わせる。

〜南から、南から
とんで来た来た渡り鳥
うれしそに　楽しそに
富士のお山を眺めてる
あかねの空　晴れやかに
昇る朝日　勇ましい
その姿　見た心
ちょっとひとこと聞かせてよ

老婆たち三人、消えて行くが、中年の妻が歌をつづける。

中年の妻　〜南から　南から
　そよぐそよそよ　南風
　さわやかに　なごやかに
　村の鎮守の森を行く
　深みどり　色もこく
　娘十八　神詣で
　その姿　見た心
　ちょっとひとこと聞かせてよ

中年の夫　……トキエ。

中年の妻　……数え年で、十八だったわ。……あのひとは、戦艦大和に乗り組んで、……死んだ。……私のために、私の未来のために死んで行く、そう云って……。その時私は、あのひとの妻だった。川村海軍中尉の。

中年の夫　川村？　……結婚したことがあるのかおまえ。

中年の妻　ええ。……あのひとの籍にはいる前に、あのひとは、死んだの。式は、あげたわ。神社で、二人きりで。……一緒にすごしたのは、出撃前の三日間……。それも港の宿屋で……。でも、その三日の間に、あたし……。……必ず死ぬ、死ぬということがわかっているひとに、……これから死にに行くとわか

っているひとに、からだを捧げる……。あんなにふるえるほどのしあわせを、からだに感じたことは、なかった……。それからあとも……、一度も……。

中年の夫　トキエ……。

中年の妻　……川村さん。……川村中尉。

海軍中尉があらわれる。
時は、昭和二十年、三月末。

中年の妻　……この次は、いつお会いできるの？

海軍中尉　……わかりません。……いや、もう会えません。

中年の妻　……

海軍中尉　あなたには、本当のことを云いのこして行きたい。秘密を守ると、約束してくれますか。

中年の妻　ええ。約束します。

海軍中尉　わたくしは、連合艦隊旗艦、戦艦大和の乗組員です。

中年の妻　……大和。

海軍中尉　国民の大部分はまだ大和の存在を知りません。排水量六万九千百トン。四十六サンチ主砲九門。射程距離、四万千四百米、世界最大最強の戦艦です。大和は、これまでの陸奥、長門とは、くらべものにならぬ最新鋭艦です。

中年の妻　……

海軍中尉　……数日後に、片道だけの燃料を積み、沖縄に向け出撃します。味方戦闘機の掩護は一機もありません。四国の豊後水道を出れば、そこはもうアメリカ海軍が制海権をもつ、敵地です。……大和は、沖縄周辺はおろか、四国沖の太平洋で、延べ数千機のグラマンＦ６Ｆ戦闘機、グラマンＴＢＦ雷撃機の攻撃をうけ、蜂の巣のように穴をあけられて沈没するでしょう。第二艦隊司令長官伊藤中将は、この作戦に反対でした。しかし、命令が出た以上、我々三千四百人の乗組員は出撃しなければなりません。全員が死ぬことは確実です。

中年の妻　なぜ、なぜそんな、

海軍中尉　沖縄の友軍を掩護するためです。沖縄にむらがるアメリカ空軍を大和にひきよせ、そのすきに沖縄防衛を一挙に成功させようとする作戦です。……それに、今をおいて戦艦大和の死に場所はない。……大和は、戦って死ななければなりません。絶対に死におくれてはならない……。

中年の妻　……川村さん。

海軍中尉　どうか、おしあわせに。祈っています。

中年の妻　しあわせって……。

海軍中尉　……わたくしは、あなたを、世界に唯一人の最愛の人と感じて、婚約をおねがいしました。しかし、その婚約は、本日唯今、解消します。解消して下さい。

中年の妻　……

海軍中尉　……日本は、敗けると思います。自分は、あと四、五日のいのちです。しかし、あなたはきっと生きのこる。生きのこって、どうかしあわせになってください。

中年の妻　日本が敗ける時は、私たち全部が死ぬときです。……生きのこるなんて、そんなこと私、思って

いません。

海軍中尉　いや。日本人が一人残らず死ぬなんてことはあり得ません。我々が死んだあと、一旦は日本中が廃墟のようになると思いますが、必ずまた、よみがえります。我々は、それを信じて死んで行くんです。……日本は、この敗戦を肝に銘じて、これまでの島国根性を清算し、きっとよみがえるでしょう。我々は、天皇の名のもとに死んで行きますが、それは、国が一旦亡び、そしてよみがえったあとに、もはや天皇というようなみなもとが名実共に消滅し、新共和国が誕生すると信じるからこそ、死んでいくんです。我々予備学生出身者は、大和の艦内でもそれを話しています。兵学校出身の職業軍人の中にも、我々と同意見の者が多数います。その仲間は、我々は、天皇のためではなく、日本の未来のために死んでゆくのだと、固く誓い合った……。あなたは、その未来を背負う一人です。そして、将来あなたと結婚されるご主人も、その一人です。あなたのお子さんもそうです。……トキエさん。我々は、グラマンの餌食になって、よろこんで死んで行きます。アメリカとの無謀な戦争をひき起したのは、陸海軍の軍人だけではありません。財閥だけではありません。国民の大部分が、日本の力というものに酔い、理性を失なった結果です。そりゃ、戦争に反対した人たちもいました。しかし、日本の大衆はほとんど全部、満州事変以降の日本のいきおいというものに快感を感じていたんです。あわよくば、アジア全部を征服して、そのよろこびにひたりたかったんです。……その始末は、誰かがつけなければなりません。誰かが、死ななければなりません。ぼくは、責任ある日本の大衆の一人として、死んで行くつもりです。ですから、逃げることはできません。無駄死にであり、犬死にであるとわかっていても、それを避けることはできません。いや、ぼくが今、大衆の一人として責任をとり、主体性をもって死にに行くことからこそ、日本の未来がはじまるんです。そうなんです。戦艦大和も我々も、決して犬死にをしに出撃するんじゃない、日本の未来にむか

って船出して行くんです。……戦艦大和は、我々の棺桶です。世界一複雑な機構をもった、巨大な棺桶です。……その棺桶は、やがて四国と沖縄を結ぶ海の、底深く沈んで、よみがえったあとの日本を、見守って行くでしょう。我々もその中で白骨となって、永久に日本を見守ります。日本人を……、そしてあなたの未来を、見つづけます。……トキエさん。しあわせになって下さい！

中年の妻　……沖縄の次は、本土にアメリカ軍がやってきます。そうしたら私も、

海軍中尉　それ以前に日本は、敗戦をうけいれるべきです。本土決戦一億玉砕などという馬鹿げたことを本当にやるとは、そこまで日本国家が狂っているとは思いたくない。トキエさん。あなたはきっと生きのこる。それを信じて下さい。

中年の妻　……あなたは、確実に、

海軍中尉　ええ。死にます。

中年の妻　……その前に、……結婚してください。

海軍中尉　それは……、いけない。

中年の妻　いいえ。私、このままではいやです。一日でもいい、あなたの妻になって、そうして……

海軍中尉　いけません。ぼくは、あなたが将来優秀な方と結婚されて、しあわせになられると思うからこそ、安心して死んで行けるんです。

中年の妻　私を、最愛の人間と、そう思ってくださるんなら、結婚してください。……さもなくば、ここで今、私のいのちを絶ってください。

海軍中尉　ぼくの気持がわからないんですか。ぼくは未来のために死ぬんです。その未来とは、あなただ。あなたのしあわせだ。……あなたを純真無垢のままに、のこして行きたい。それがぼくの愛情です。祈り

です。

中年の妻　……わたくしを、あなたのものにしてください。おねがい。……それがわたくしの、祈りです。

ベルリオーズの幻想交響楽、第三楽章がきこえてくる。

やがて二人は、闇につつまれ、しばらくは闇の中にベルリオーズが流れて、その上に中尉の言葉が重なる。

海軍中尉の声　始末は、誰かがつけなければなりません。誰かが死ななければならない。ぼくが大衆の一人として責任をとり、主体性をもって死にに行くことからこそ、日本の未来がはじまるんです。戦艦大和も我々も、決して犬死にをするのではありません。未来のために出撃して行くんです。大和は四国と沖縄を結ぶ海の、底深く沈んで、よみがえったあとの日本を見守って行くでしょう。我々も白骨となって日本を、日本人を見守ります。あなたの未来を見つづけます。

明るくなると、中尉は消えている。

ベルリオーズはまだ流れている。

中年の妻　……川村さんがうちへくると、二人でベルリオーズを聴いたわ。……あなた、ご存知でしょう、私がもってきたＳＰレコード。……今でも、うちに、

中年の夫　……なぜ、そんな話を。

音楽、かすかになって行く。

中年の妻　それは私が云いたいことよ。……あなたはきっと、あのおばあさんから連絡をうけて、そとで会っていたんだわ。そうして私を納得させるために芝居がかりな招び方をして。カズ子さんもそうよ。ヨシオも仲間かも知れないわ。

若い夫　かあさん。そんな……

中年の妻　なぜ私が必死になってこのうちをとりしきるのがいけないの？　私だって、あのおばあさんに負けない過去があるのよ。ほんとは私だって、踊りだのカクメイだのと云って、生きているあかしのためなら何もかも放って、したいことをしたいわ。でも、今の私のつとめは、平凡でも明るいうちを家族のためにつくることだときめて、自分をおさえているんだわ。……ひとの気も知らないで、私にいろんなものを見せつけて……だから私、自分が隠していることを云わないではいられなくなったのよ。三十四年もの間、誰にもだまっていたのに。……私もう、このうちの主婦をやって行く力が、つづきそうもない……。

中年の夫　おれは、おまえに見せつけたりはしない。あのおばあさんのことも誰のことも、招んだおぼえはないんだ。

中年の妻　……じゃあ、何なの、あのひとたちは。……幽霊だとでもいうの？

若い妻　おとうさん、おっしゃったわね。私たちが幽霊かも知れないって。このうちはほんとは誰もいない空家なのかも知れないって。

中年の妻　そんなことがあってたまるもんですか。このうちには私がいるわ。あなたがいるわ。ヨシオがい

る、カズ子さんがいる。あなた方、ちゃんと生きているんでしょう。ねえ。生きていると云って。……それとも、生きているのは、あのおばあさんのほうなの？　はっきり云って。

中年の夫　それとも、生きているのは、川村中尉……。……トキエ。おまえが今守ろうとしているしあわせは、川村中尉が云いのこして行ったしあわせなのか……？

中年の妻　……そうだと云ってほしいの？　それとも、私の今のしあわせは、川村中尉の云ったしあわせとは別のものだと云ってほしいの？

中年の夫　……わからない。……おれにはわからない。

老婆が、老婆の姿に戻って、いつの間にか隅にうずくまっている。

老婆　トキエさん。……川村中尉に抱かれたときのこと、今でも忘れられない……。わかるわ。……抱かれたというより、あなたが中尉を、抱いてあげたのよね。母親のように。……私もトラック島で、川村中尉のような青年士官を、何人も、いえ何百人も抱いてあげたわ。

中年の妻　……やめて。

老婆　私にも、それはとても思い出なのよ。死ぬ覚悟をきめた士官さんの、その一人一人に、その度毎に、私、シンから惚れたわ。……いいえ本当よ。本当に好きになったわ。……みんながみんな、必ず死ぬとわかっているひとばかりだったら、私、からだがとても保(も)たなかったと思うの。でも、陸上勤務のひとたちも、みんなやさしかった……。

中年の妻　もうだまって。おねがい。

老婆　……私も、トラック島の時代は、いちばんなつかしいの。……昭一郎。あなたの奥さん、私のことを
　ようくわかってくれそう。やっぱり来てよかったわ。
中年の夫　……（むしろ怒りをこめて）お母さん。
中年の妻　……あなた。

　　このときまた「今晩は」という女の声。
　　くり子である。

老婆　くりちゃんだわ。
くり子の声　くり子ですけど、ちょっと入ってもいい？
老婆　……どうぞ。（たまらずに場をはずそうとした中年の妻に鋭く）トキエさん！　逃げてはいけない
　わ。あなたのうちよ、ここは。
中年の妻　……
くり子　（入ってくる）おじゃまします。

　　若い妻が小さく声をあげる。くり子は、シュミーズひとつの姿で、髪をネッカチーフで束ねて
　　いる。くり子の時は昭和十七年、場はトラック島の娼家、綾菊の部屋である。

くり子　（入ってくるなり部屋中を見上げるように見渡して）へえ……、今度の部屋は一段とまた上等ね

え。ますます差アつけられちゃったわねえ兵隊用と。もっとも綾ちゃんは司令官閣下の思いもんなんだから特別なんだろうけど……（と、おちつき、老婆を初めて正面から見て）何よ綾ちゃんのその恰好は。

老婆　わからない？　司令官閣下のお好みなのよ。

くり子　へえ……、男って年よりになるほど若い娘を抱きたがるっていうけど、あの司令官は……、そうか、自分の奥さんに似せようってわけね。

老婆　まあね。私をお上品なお婆さんに仕立てて、ご持参の炭とコンロとお茶道具でお点前をするのが閣下の何よりのたのしみなのよ。

くり子　それにしてもちょっとふけすぎよ綾ちゃん。

老婆　ふふふ。そうかしら。

くり子　（しどけなく坐って）ああ……、腰が痛い。……昨日さ、航空母艦と戦艦が入ったでしょ。

老婆　ええ。赤城と、大和。

くり子　どっちも乗組員が多いからねえ、たまんないのよ。朝九時から夕方まで休みなしでさ、三十八人相手にしちゃったわ。

老婆　三十八人……

くり子　せめて二十人までにとめておきたいっていうのが、私の営業方針なんだけどさ。何時間も行列して待ってる水兵さんを、今日はもうおしまいって、すげなく帰すのもかわいそうでねえ。帰れって云えば、そりゃおとなしく帰るわよ。でもさ、おねがいしますって、手を合わせてたのまれると、まるでこっちは神様みたいな気持についなっちゃうのね、いやとは云えなくなるのよ。それで一人すませると、次の兵隊がまた、手を合わせてよろしくおねがいしますって、こうでしょう。結局行列の一番終りまですませない

と、それこそすまなくなっちゃって……。もっとも、ほら、島に来たての頃綾ちゃんと一緒に見に行ったじゃない？　レコードホルダーのまきちゃんってひと。あのひとのレコードは、一日八十五人だもんねえ……。

中年の妻　あたし、もう……（出て行こうとする）

若い妻　おかあさん。（と、ひきとめて）川村中尉もトラック島で女のひとを買ったかも知れないわ。大和もトラック島へ。

中年の妻　カズ子さん。

くり子　ねえ。綾ちゃんだって、司令官が来る日は別でしょうけど、戦艦や航空母艦が入ったときは士官さんを十人やそこらはこなすんじゃない。

老婆　……そうね。十人じゃきかないときもしょっ中よ。士官は行列しないでしょ、それに、一人一人が長っちりだから、どうしても夜おそくまでかかるのよ。

くり子　なるほどねえ。士官専門の綾ちゃんなんかのほうが、考えようによっちゃ私たちより大変かも知れないわね。兵隊は純情でいいわよォ。とにかく、飢えに飢えてるからね。行列して順番待ってる間に、自分にとって最高の女の顔とからだを、まざまざと頭ん中にうかべてさ、それを何時間もなめるようにしてから中へ入ってくるでしょ。だからもうベッドへ来てズボンをさげて、こっちのからだに触れるか触れないかのうちに終っちゃうわけよ。かわいいもんよ。

老婆　兵隊はみんなそう？

くり子　みんなってわけじゃないけど、大体そうね。一度あたし、行列の一番ビリのひとにきいたことがあるの。あんたたち、十人が十人、あっという間に終っちゃうけど、それで面白いのかって。そうしたら、

その兵隊がいうのよ、いや、自分は内地にいる時、ずいぶん女遊びをしましたが、女のからだを、これほど慕わしく、これほど神々しいものに感じたのは、戦地にきてからであります。そりゃ、性欲そのものは、自分一人でも処理できます。しかし、それだけではどうしてもだめなんであります。……女のからだには、たとい白粉や香水をつけていなくても、女だけにしかない女のにおいがあります。そのにおいをかぎたい、ほんものの女の肌にこの手でさわりたい……、その思いが何ヶ月もたまると、しまいには気が狂いそうになります。そういう時は、戦闘があればいい、敵とたたかいたいって、むしょうに思うわけであります。タマがとんできてもこわくないのはそのせいだと自分は思います。本日はどうも、ありがとうございました……。そう云って帰って行ったけど、眼に涙を浮かべてたわ、その兵隊。

老婆　将校も、気持は同じよ。三人に一人は、ただ話をするだけで帰って行くの。

くり子　そう……。あたしもう、内地になんか帰りたくないわ。このまま島にいたい。

老婆　……でも、ほんとにそう思う？　契約の期間がすぎても、くりちゃん、ここで働く？

くり子　……

老婆　いくら兵隊がみんな純情でも、一日に三十人も四十人も、いれ代りたち代り男に……

くり子　やめてよそんな……。そりゃあたしだって、ふっと我にかえることはあるわよ。ああ、いやだ、いやだって……。あたしね、この間、変な夢を見たの。人が死ぬときって、それまでの自分の一生を何秒間かの間に全部思い出すっていうけど、そうじゃなくて私、これから先のことを、死ぬまでのことを全部、まるでほんとみたいに、映画を見るみたいに夢でみたのよ。

老婆　先のことを？

くり子　ええ。いろんなことをいっぺんに。口じゃあ、とても全部は話せないくらい。……おしまいが、と

ても悲しいのよ。その夢の中で私、しあわせなことなんてひとつもないの。何ひとついいことがないまんまに死んじゃうの。それも、自殺よ。

老婆　くりちゃん……。

くり子　戦争も、敗けいくさでね、もっともすぐに国中がにぎやかになって敗けたんだか勝ったんだかわからなくなるし、天皇陛下だってちゃんとむかしの宮城にいらっしゃるんだから、勝ち敗けなんて問題じゃないらしいんだけど、あたしなんかは、やっぱりモロに負けいくさをひっかぶっちゃうわけ。その証拠に、十年ぐらいは、アメリカ兵に体を売る羽目になるのよね。それも自分でのぞんだわけじゃないの。何か堅気な仕事に就こうと思ってお役所へ行ったら、私がトラック島で商売してたことがちゃんとわかっちゃってるのね。じゃあ、あんたはここで働いて下さいっていうから行ってみたら、そこがアメリカ兵相手の慰安所なのよ。手まわしがいいったらないんだから。アメリカ兵の一番乗りが日本へやってくる一週間前にはもう、横浜と東京にちゃんと慰安所ができてるんですもんね、トラック島にあったのとそっくりなやつが。それでさ、そこの役人のいうことがいいのよ、あなた方は、大和撫子としてお国のために働いて下さい。そっくり同じことをトラック島へ行く前に港でわたしたち云われたでしょ。あれとおんなじなの。ところが、兵隊がちがうのよねえ。純情そうなのもいたけど、大抵は、しつっこいというか、長いっていうか、ねちねちするやつばっかりでさ、それこそ初日からもうくたくたよ。そのうちアメリカ兵が少なくなって、自分で店を出したり、二号になったり、それに、ちゃんとした結婚もしたわ。善人でねえその相手が。とてもやさしくしてくれたんだけど、私はとうとうなつかなかったわ。なつかなかったなんていうと動物みたいだけど、ほんとにそうなのよ。だって、アメリカ兵に体を売ってたのはともかく、トラック島にいる時分に一日に三十八人も相手にした経験って、忘れられるもんじゃないもの。亭主は何にも

うたがうようなそぶりはみせないんだけど、自分が隠してるってことに自分でいやになって、どんどん気がめいってきちゃうのよね。たまらなくなってあたし、うちをとび出したわ。まだ四十そこそこだったしね、若づくりしてキャバレーに出てさ、一時はナンバーワンになってそりゃ売れたもんよ。あたりまえよね、毎晩ちがう男に抱かれることなんか何とも思わないんだから。でも、そのうちに、つくづくいやになってきてさ。男っていう男がみんな、そりゃこすっからいんだから。そうなると、変なもんよね、おねがいしますって、手を合わせてくれたトラック島の時代がむしょうになつかしくなって……、あの頃に戻りたい、一日に三十人でも四十人でもいい、もう一度、私をほんとに神々しいくらいに思ってくれる相手に自分を売りたいって、……ほんとはおかしな話だけど、真剣にそう考えたの。そんなことを内心で思ってると、ますます世の中と歩調が合わなくなってさ、気持が底なしにめいっていくばかりなのよ。それほどお金には困らなかったけど、とうとうあたし、何となく死にたくなっちゃってね、ガス管の管を抜いて、ひゅうひゅういうガスを口の中に吸いこんでやったわ。遺書も何も書かずにね。……ほんとは綾ちゃんにだけはひとこと書きのこしたかったけど、もしその遺書が人にみられて、綾ちゃんが私と同じ商売をしてたってことがわかるといけないと思って……。綾ちゃんはきっと、誰かと一緒になってると思ったの。むかしのことを、隠して。

老婆　……そうよ。私も、ちゃんと結婚したわ。三年とちょっと、つづいたの。でも、くりちゃんと全くおなじよ。だめなの。私は慰安婦でしたって、どうしても云えなくて……、それを隠してることで、だんだんに体が重くなって……やっぱり、だまってうちを出たわ。バー、キャバレー……、あたし、自分がきたない商売をしてるって、そのとき初めて感じたわ。ほんとにお金で、お金で身を売ってるって……。だって、お国のためも何にもなくて、唯もう、お金だけなんですもんね、人と人とのつながりが。

くり子　もうよしましょうよ。ごめんね、変な夢の話なんかして。
老婆　夢ではないわ。……くりちゃん。私はちゃんと、戦争に負けてからずうっと今まで生きてきたのよ。
　六十九よ、あたし。ほんとのお婆さんなのよ……。
くり子　綾ちゃん……
老婆　夢じゃないわ。……くりちゃん。あたし今日……、初めて知ったわ。……かわいそうに……。あんた、ガスなんか吸って、ひとりぼっちで……さびしかったでしょうねえ、くやしかったでしょうねえ……
　（涙にくれる）
くり子　よしてよ綾ちゃん。私はちゃんと、生きてるじゃないの。そりゃいずれ死ぬでしょうけど、今はトラック島のくり子としてちゃんと商売をしてるじゃないの。戦争だってきっと勝つわよ。シンガポールだってジャワだって、ヒリッピンだって、あっという間に占領しちゃったんだもん、負ける目なんてどこをどう押したって出てきっこないわよ。
老婆　そうね、あたし、昭和四十年にお客さんと一緒に東南アジアを旅行したことあるの。シンガポールでもジャワでも、ヒリッピンでも日本の自動車がわがもの顔に走ってるし、日本の会社がいっぱいあって、日本人がいばりくさってるんだもんね、もしかしたら戦争に勝ったのかも知れないと思ったけど、やっぱり私にはそうは思えなかったわ。みんな夢なのよ。今の日本なんて、私たちにはみんな夢なのよ。そうしてくりちゃんが日本へかえってきて自殺するまでのことは、それは夢じゃない。あたしたちは、置いてけぼりにされたんだわ。日本の中のトラック島に。あの島に。でも、それもいいじゃない。日本中の普通のひとが根も葉もないしあわせのその夢をみているときに、私たち大和撫子、もと従軍慰安婦ぐらいは、根も葉もあるふしあわせを味わってさ、はっきり眼をあけて夢のそとにいることも、それもいいじゃない？

ねえ、くりちゃん、そう思わない？

くり子　……私が、国へかえって、国は戦争にまけて、いろいろあった末にガス自殺するって、ほんとうのことなの？　私、そうなるの？

老婆　……ええ。そうなるのよ。

くり子　……いや。いやよあたし。そんな……（嗚咽し、崩れる）

老婆　泣かないで、くりちゃん。……私たちはまだいいほうかも知れない。私たちが抱いてあげた兵隊さんたち、みんな、何のために死んだのか今はわからないでいるでしょうけど、あの兵隊さんたち、私たちの肌のことは、きっとおぼえてるわ。手を合わせておねがいしますって云った、くりちゃんの肌のにおいは、それだけはきっとおぼえてると思うわ。

くり子　……そうね。きっとそうね。……あたし、これからも一生懸命、まごころをこめて水兵さんたちをなぐさめるわ。四十人行列したら四十人、六十人だったら六十人、たとえみんな、あっという間でも、それが永久にのこる思い出になるんなら、あたし、女として本望よ、からだを、自分のあそこを、誇りに思って、毎日一生懸命に生きるわ。……じゃあ、綾ちゃんも頑張ってね。

老婆　……（じっとたたずんでいる）

くり子　……綾ちゃん。

老婆　……くりちゃん。（くり子を抱きしめたい気持をじっと耐えている）

くり子　……おやすみ。

くり子、去って行く。若い妻がすすみ出る。

若い夫　（遠慮がちに）カズ子……。
若い妻　おばあさん。あのひと、ほんとに自殺したの？
老婆　……ええ。
若い妻　……あたし、トラック島へ行ってみたい。
老婆　……あなた、新婚旅行はどこへ行ったの？　グァム島？
若い妻　……ええ。
若い夫　カズ子、もう二階へ行こう。
若い妻　いや！
老婆　カズ子さん。あたし、くりちゃんには黙っていたけど、あなたにはつたえておきたいわ。……戦争にまけたあと、横浜であたし、犯されたの。アメリカ兵に。
若い妻　……（あとじさりする）
老婆　どんなに長い間お商売をしていても、力づくで犯されるというのは、いやなものね。……相手がひとりだったら、別だったかも知れないけど、四人か、五人……、かこまれて、……つづけて、
若い妻　（さらにおびえて、しりぞく）
老婆　アメリカ兵の腕の力って、それはもう鉄の棒のように強いの。組み伏せられた時、まるで石の下敷きになったみたいに、一センチだって身動きできないの。そうなると、どうにでもなれっていう気持には逆になれないのね。動けないからだをすこしでも動かそうとして必死になるの。いや、絶対にいやって、心の底から思ったわ。それまでに何百人の男に抱かれたかわからないのにそのときのアメリカ兵が……、私

を身動きできないようにして、そうして、両足で私のからだをこじあけて、突き刺されたとき、あたし……、世界中のひとにきこえるくらい大きな叫び声をあげたわ。……助けてくれっていう叫び声じゃないの。このうらみを晴らすためなら、世界中の人間を全部殺してもいいって、そう思って……。でも、そのあとアメリカ兵が起き上っても、そのときはもう全身の力が抜けて、おさえられてはいないのに、やっぱり動けないの。……次の兵隊がのしかかって、今度はそんな私をふるいたたせるように、からだ中をさすりながら、いいように私を……。……三人目のときはもう、眼の奥が真暗になって、自分が何をされているのかわからないの。死ぬと思ったわ。死んだほうがいいって。このまま殺してくれたほうがいいって。……でも、不思議ね、女のからだって、ほんとに不思議ね、四人目か、五人目か知らないけど、すうっと頭の中が透明になって、からだの感じが、それは、はっきりと戻ってきたの。天に昇ったような、とても気楽な、それでいて、何かの宝石で出来たキリのようなもので、体の奥を刺されているような、たとえようもない気持のよさが、爪先までつたわって……。

若い妻　……（うずくまって）ああ……、いやっ。……いやよ。

若い夫　……カズ子。

若い妻、戸口にむかって走る。

若い夫　カズ子！

一瞬、闇となり、かすかに明るくなると、若い妻があおむけに倒れ、その横に、若い男が立ち

迷ったような恰好で、たたずんでいる。
老婆は消えている。

若い妻　……（若い男を見て、そのままの恰好で）あんたは、まだなの？
若い男　……え？
若い妻　何人……何人、いたの？
若い男　よ、よにん……
若い妻　あんたを、いれて？
若い男　う、うん。
若い妻　みんな、どこへ行ったの？
若い男　にげ……、にげたらしい。
若い妻　……あんたは、まだなのね。だから逃げないのね。
若い男　……きみ、大丈夫？
若い妻　何が……？　……どうするの、あんた。
若い男　……いいの？
若い妻　……
若い男　……でも、おれ、もう……。おれ、順番を、きめられたわけじゃないけど、一番ビリになって……。いつもそうなんだ。……きみ、誰かに、話す？　いまのこと。
若い妻　そんなことより、……早く、私を抱きなさいよ。

若い男　……
若い妻　そのつもりなんでしょ。
若い男　……うん。……でも、もう悪いから、
若い妻　悪くはないわ。
若い男　……（いきなり膝をついて）ごめん。ごめんなさい。みんなに代って、あやまります。
若い妻　（若い男の手にふれて）あやまることなんかないわ。……さあ、（手をひきよせる）
若い男　（こわくなって手を振りほどき）……ほんとに、ゆるしてください。（たまらなくなって泣き出す）
若い妻　（ひとしきり、泣くのを眺めて）なぜ泣くの？
若い男　わかりません。（と、泣きじゃくる）……おれ、一番ビリになったけど……おれだけは何にもしてないけど……ほんとのことというと、あんたを狙って、みんなを連れてきたのは、おれ……おれなんです。
若い妻　……なぜ、ひとりでこなかったの。
若い男　……
若い妻　私が、好きなの？
若い男　……（泣きじゃくりながらうなずく）
若い妻　……じゃあ、抱いたら？
若い男　それをもう云わないで下さい。ごめんなさい。ごめんなさい……（泣きながら立ち上がる）
若い妻　ねえ……。あんた、名前なんていうの。
若い男　知りません……。

若い妻　知りません？
若い男　名前なんか、そんなもの……
若い妻　記念に、きいておきたいの。
若い男　記念に……？
若い妻　ええ。私が、……私が、犯されて、そうして、闇夜に星をみた日の記念に。
若い男　……ゆるしてくださいって、云ってるじゃないですか。なぜおれひとりをいじめるんです。おれは、おれだけは何もしていないのに。
若い妻　だから、私がこうして寝ている間に、早く……
若い男　……（にじり寄るが）できません。できません！ごめんなさあい……。（かけ去る）
若い夫　……カズ子。
若い妻　あなたと知り合ってから、一年ぐらいあとかしら。私……（身を起こしながら）……輪姦されたの。
若い夫　……嘘だ。
若い妻　いいえ、本当なの。……今、わかったわ。それなのよ、あたし、あのときのことが忘れられないんだわ。私にささやいたのは、あの時の思い出なんだわ。
若い夫　思い出？
若い妻　ええ。たしかに、思い出よ。……私もう一度あの時のように、からだをひらきたいの。天にむかって自分をひらくようにからだをひらきたいの。……三人目のひとのとき、あたし急に、世界で一番いい女のように思われて、だから、四人目のあのひとにも抱いてもらいたかった。それが、ごめんなさいなん

て、泣きながら逃げるなんて……、そうよ、あたしその時、口惜しかったんだわ。決してほっとしたりはしなかった。あれからずうっと私は、ほっとすることがなかったのよ。

中年の妻　カズ子さん……。

若い夫　……（妻の方へ近づく）

若い妻　私はあなたひとりのものではないわ。むかしも今も、これからも。

若い夫　……（たまらずに妻をなぐりつける）

中年の妻　ヨシオ。

若い妻　なぐられても平気。

中年の妻　……ヨシオ。大丈夫よ。カズ子さんはあなたを愛してるわ。だからあなたに告白したのよ。告白したかったのよ。

若い夫　……ぼくは信じない。輪姦なんて、幻想なんだ。

若い妻　そうね、これから私が目標にする、ひとつの幻想……。

若い夫　カズ子。……おれは唯の他人なのか、きみにとって。

若い妻　ええ。他人だわ。でもあなたがのぞむなら、私、あなたの妻のままでいるわ。一応は。

若い夫　一応は！

中年の妻　カズ子さん。あのおばあさんのことはもう忘れなさい。

若い妻　私は自分のことを話しているんです。あのおばあさんのことではないわ。

中年の妻　いいえ、あなたはあのおばあさんにとりつかれているのよ。あのおばあさんがあなたのなかに入りこんでいるのよ、だから。

若い妻　それはおかあさんも同じだわ。だから川村中尉のことを告白したんだわ。夫を愛してるから告白したなんて嘘よ。おかあさんは本当のことをおっしゃったじゃないの。あのとき以来一度もあんなよろこびを味わったことはないって。

中年の妻　それは……。

若い妻　おかあさん。ベルリオーズの幻想交響楽のレコード、私にください。

中年の妻　……

若い妻　ください。

中年の妻　……あなたにとっては何の価値もないわ。

若い妻　いいえ、あります。

中年の夫　これからも、大事にもっているつもりか。

中年の妻　……

中年の夫　え、トキエ。

中年の妻　……おのぞみなら、あのＳＰレコードは、粉々にくだいて捨てるわ。

若い妻　砕けばなおさら思い出はひろがるわ。それより他人にやってしまうことよ。私にくだされば、それがお姑さんからお嫁さんへの一番いい贈りものになるわ。私、おかあさんのあとをついで、幻想を大事にしまっておくわ。

中年の妻　カズ子さん。……あなたにはあげません。あのレコードは絶対にあげません。

中年の夫　なぜだ。なぜカズ子には、

中年の妻　私の思い出は、どこまでもきれいなものよ。……ヨシオ。あなたがこのひとと結婚したのは間違

いだったわ。今からでもおそくないから、考え直すべきね。
若い夫　お母さんこそ考え直したらどうなんです。あるいは父さんが考え直す……。そうでしょう父さん。お母さんは家族のしあわせのために生きているんじゃない、川村中尉との誓いにしばられて、それでしあわせしあわせってわめいてるんだ。
中年の妻　ヨシオ。
若い夫　中身なんかどうでもいいんだ。お母さんにはお母さんの根と葉がある。川村中尉っていう根がある。だから、我々の本当のしあわせなんてどうでもいいんだ。息子を塾に通わせて、いい学校を出して、いい会社に入れて、いいと思う結婚をさせりゃそれで満足なんだ。自分から見て、こっちがしあわせそうにしてりゃ、それでいいんだ。唯レールの上にのっかって、スピードもブレーキも、新幹線みたいに中央のコントロールルームで自動的にあやつられてる身のかなしさなんか、想像したこともありゃしない。おれの、おれの二十五年の生涯ってのはそうなんだよ母さん。その証拠に、おれに何の思い出がある。小学校から中学、高校、大学、会社、特別な思い出なんてどこにある。何にもありゃしないじゃないか。あのおばあさんにいくらそそのかされたって、こっちは何にも語るべきことなんかないんだからね。さっきからもう恥ずかしくって、とても同席しちゃいられない心境だったよ。父さんはまだ云ってないけど、特別な思い出の二つや三つは必ずある。ところがおれには何にもない。きれいさっぱり、……ない。
若い妻　ほんとに何にも、何にも思い出がないの？
若い夫　……カズ子。……もう一度訊く。おれはきみにとって唯の赤の他人なのか。
中年の妻　ヨシオ。……あなた、今云ったこと本心からなの？　お母さんが唯自分のために……、ほんとうにそう思ってるの。

若い夫　ぼくはカズ子と話してるんだ。
中年の妻　私はあなたと今、話したいのよ。
若い夫　ぼくは今、カズ子と話したいんだ。……カズ子。一応は妻でいるって、どういうことなんだい。
若い妻　あなた、そんな云い方できるの？
若い夫　何が……
若い妻　……私の目の前で、何にも思い出がないって云い切ったひとよあなたは。
若い夫　きみと出会ったということは、思い出というより、
若い妻　云いわけはよして。……あなたも、一応私の夫であればいいのよ。それ以上はのぞまないわ。
若い夫　おれは……。それじゃあ、いやだ。
中年の妻　ヨシオ。
若い夫　カズ子。……おれたちの部屋へ行こう。
若い妻　私に命令しないで。
若い夫　……命令してるんじゃない。
若い妻　じゃあ、私の自由よ。（しっかりと坐る）
若い夫　……カズ子。おれたち、そんなに烈しい恋愛だったとは、いえないかも知れない。しかし、おれときみみたいに、自然に結びついて、自然に結婚生活を送るということは、そうたやすくできることじゃないんだぜ。今の平和を、大事にしよう。大事にするだけのことはあるんだよ、ふたりのくらしってものは。そうだろう、お互いひとりひとりに戻ればつまらん人生でも、ふたりっていうのはちがうんだ。それを大事にしないで、ほかに何がある。

若い妻　あるのよ。ひとりとひとりで、ふたり。ふたりのしあわせ。それだけだって私、思いたくない。
若い夫　思いたくなくても、それだけだということから逃げるよりましだ。
若い妻　逃げやしないわよ私。……いつまでも私を自分一人のものだって云ってるとほんとに嫌いになるわよ。
若い夫　……わかった。わかったよ！　……さっさと、通りへ出て行け。……裸になって、踊りを踊れ。本当に一度、やってみるがいいんだ。
若い妻　……ええ。……その日のために、レッスンをつづけるわ。
若い夫　……（妻に近づくが、だまってそのまま通りすぎ、ぐったりと坐る）……（ぽつりと）ふん。淫売。
若い妻　ふふ……（次第に高く笑い出す）
若い夫　（たまらずに立上って）カズ子！
中年の妻　（夫に）あなた。……どうにかして。……おねがい。……一家の、主人でしょう。……支えて。……ねえ、私たちをしっかりと支えて。
中年の夫　……支える。
中年の妻　ええ。
中年の夫　……今さら、そんな……。先頭を切ったのはおまえじゃないか。
中年の妻　……あなた、まだそんな。
中年の夫　南から、南から……、あれはたしかに、いい歌だ。しかし、せめて、歌だけに……、何のことかわからなくても歌だけにとどめてもらいたかった……。

中年の妻　数え年で十八のときよ川村中尉のことは。子供だったのよまだ。あの頃の私と今の私は人間がちがうわ。

中年の夫　そう、すっかりちがっているんだ。おれは、会うのがおそかったんだ。いや、おまえにまだ出会っていないんだ。これからも、もう、絶対に会えない。

中年の妻　そんな、なさけないことを云わないで。お互いに、大人じゃないの。

中年の夫　大人？

中年の妻　ええ。

中年の夫　大人って何だ。

中年の妻　あなたにだって若い頃の思い出があるでしょう。私に隠してる思い出が。

中年の夫　……

中年の妻　ないの？

中年の夫　……あるとも。あるともさ！

中年の妻　それを話して。そうすれば、おあいこだわ。さあ、話して。

中年の夫　……

若い夫　……父さん。ぼくも聞きたい。

若い妻　おとうさん。

中年の夫　……

中年の妻　もし何にもないんだったらつくりごとでもいいわ。何でもいいから話して。さあ、早く。

中年の夫　何でもいいからとは何だ。馬鹿にするんじゃない。

中年の妻　ないのね、あなたには何にも。
中年の夫　ある。あるじゃないか！　……あのお婆さんだ。あれこそ、おれの秘密だ。本当のおふくろだ。これからは、毎日一緒なんだぞ。おれが何にも云わなくたって、おれが生まれた昭和のはじめから今にいたる五十年のすべてを、あのおふくろがしゃべってくれるさ。云ったろう、あのお婆さん。私は夢のそとにいて、はっきり眼をあけているって。その眼で、そのからだで、おれたちが今見ている夢のなかのしあわせを、毎日、丹念に、ぶちこわしてくれるさ。……このうちには平和はなくなる。時間もなくなる。場所もなくなる。広っぱさ。通行自由の広っぱさ。ここは湯ヶ原の無人別荘だ、浅草の置き屋だ、トラック島の慰安所だ、焼け跡だ、アメリカ兵が女を強姦する倉庫裏の袋小路だ、淫売屋だ、死体置場だ、戦艦大和の司令塔だ、海の底だ、天の上だ、女のまたぐらだ……。リビングルームだって？　ダイニングキッチンだって？　セントラルヒーティングだって？根も葉もない噂にすぎんよそんなものは。だいいちみんな英語だ。アメリカだ。アメリカに、ヨーロッパに、経済戦争で勝ったって？　八十年代は、日本が世界の指導者だって？　冗談じゃない、……夢だ、みんな夢をみてるんだ。……夢のそとにいる人間がそれを知っている。あのおふくろが、知っている。
中年の妻　……あなた。……おねがい。おちついてちょうだい。

中年の妻、居間やキッチンをうろうろ動き、またもとへ戻る。

中年の妻　……もう、もういいのよ。……そうね。……これからみんなで、デザートをつくらない？　生クリームがいっぱいあるの。……でも、それより皆さんまだ、果物をたべてないわね。だからおちつかない

のよ。……さあ、召し上がれ。（伊予柑の皮をむきはじめる）

若い夫がまずテーブルに来て、伊予柑をたべはじめる。

中年の夫も若い妻も、テーブルにくる。

黙々と、そして段々に狂おしいように伊予柑をたべる家族。

中年の妻は、自分ではたべずに、薄皮までむいて果物の中身を皿に次々に入れて行く。

中年の妻　……たべ終ったら、かたづけをみんな、手つだってね。お夕飯のあとかたづけ全然まだ……

若い夫　……今までのこと、食後の運動だったって、お母さんはそうかたづける気？

中年の妻　そうかたづけるわけではないけど、とにかくかたづけないことには……。

若い夫　……おれ、父さんたちと、別になる。経済的なことだけだからね。今一緒に住んでるのは。もともと、別のほうが自然なんだ。

若い妻　私は別になりたくないわ。

若い夫　……なぜ。

若い妻　一緒のほうが経済的だからよ。

若い夫　そんな心がまえで、生きてるあかしもへったくれもあるもんか。まず、独立だ。

若い妻　……じゃあ、ご自由に。私はここへ残るわ。

若い夫　なあに？

若い妻　（中年の夫に）いけません？

中年の夫　どうぞご自由に。ここは広っぱだからね。
中年の妻　あなた。
若い妻　……そうね。……あたし、ここで、こどもを生みたい。
若い夫　……？
中年の夫　こどもが？
中年の妻　カズ子さん。
若い妻　……まだたしかではないけど、そうだと思うの。……昨日までは、考えもしなかったけど、できたらあたし、その子を私生児として生みたい。そうしてその子をおかあさんか実家の母にあずけて、私は踊りをつづけるの。
若い夫　……
中年の妻　……もう、やめて。……おねがい。やめて。……私たちにいったい、どんな罪があるの。なぜこんな風にばらばらにならなければいけないの？　……広っぱに、ばら〳〵でいるよりは、たとえ毎日喧嘩になっても、あのおばあさんに居ついてもらって、一軒のうちらしくみんなでくらしたほうがいいわ。もし、そうできるのなら。……あのおばあさんが、あなたの本当の母親でもうその母親でも、そんなことはもうどうでもいい。……ねえ、あなた、あのおばあさんは、家族がほしいのよ。私たちのしあわせをこわしたいんじゃないわ。私たちと一緒に、しあわせになりたいのよ。きっとそうよ。
若い妻　そうね。私たち今日、お互いを傷つけ合ったかも知れないけれど、こんな生き生きしたよるは、このうちで初めて。おばあさんのおかげよ。……この先、もっと何かが起きたって、何にも起こらないよりはいいわ。あのおばあさんと一緒にくらしましょう。

若い夫　……冗談じゃない。むかしの歌をおぼえて、日本史の現代を勉強して、それですむってもんじゃないよ。……あのおばあさんは……あのおばあさんは……、もちろんおれにはわかんないけど……みんなが云うんなら、招んでもいい。覚悟をきめるよ。戦争だって、カクメイだって、ひきうけて……。でも……。……カズ子。子供ができたって、本当かい。

若い妻　……ええ。

若い夫　……

中年の夫　ヨシオ。……トキエ、カズ子。おれがあのおばあさんを心で招んだというのは、それは本当だ。……おれは、たしかに招んだ、大声で。……あのおふくろがやってきたら、うちの中がどうなるか、考えもしなかった。考える前に、招んでいたんだ。

れんぎょうの花が一株うかぶ。

中年の夫　……そう、あの花だ。……あの花が……

れんぎょうの影から、老婆があらわれる。

中年の夫　……お母さん。

老婆　……昭一郎。おぼえている？　あなたが生れたのは、四月の初めだった。いなかのうちには、れんぎょうの木が、四方八方に枝をのばして、その枝の全部に、黄色い花が……ぱあっと、ほんとにはなやか

に、まるで夢のように咲いていたわ。
中年の夫　自分が生れた時のことなど、おぼえているはずはない。でも……
老婆　そう……。そのれんぎょうの花が、あなたの家の庭に咲いているのを私、見たの。だからこのうちだとわかったの。咲いているでしょう、れんぎょうが。ほら。

れんぎょうの株がさらに多く浮かび上がる。

老婆　あの花は、あなたが生れたときに、いなかに咲いていた花よ。あの木よ。あのれんぎょうに間違いないわ。だって、根も葉もない木に、本当の花が咲くはずはないんですもの。……私のふしあわせには、根も、葉も、あるの。だから、あんなに、花が咲くのよ。花には、しあわせもふしあわせもないわ。唯、きれいであればいい。そうでしょう？　……もしおのぞみなら、私のふしあわせの根を、もっと、もっと株分けしてあげる。……いかが？　庭中を、あの花でいっぱいにしてみたいと思わない？　え、昭一郎。
若い夫　ぼくは、れんぎょうなんて嫌いだ。
若い妻　私はバラが好き！
老婆　結構よ、バラでも。咲かせてごらんなさい、思い通りに。……きれいな本当の花のためなら、何でもすべきよ。戦争でも、カクメイでも、踊りでも、売春でも。何でもすべきよ。……ちがう？　……ねえ。……なつかしくはない？　軍楽のひびきが。……平和でも、平和でなくても、どっちにしても人はどんどん死んで行くんですもの。死に方は、花々しいほうがいいと思わない？……え、昭一郎。……カズ子さん、あなたの踊りをみたいわ。踊って、踊って、踊って、死ぬまで踊りつづけるひとを一度あたし、みた

いと思っていたの。あなたなら、できるんではないかしら。

若い妻　……

老婆　……どうしたの。踊らないの？

老婆、小さな身振りで、低くうたう。

老婆　〜ハァー

踊り踊るなら　ちょいと東京音頭　よいよい

花の都の　花の都の真中で

さて　ヤートナソレヨイヨイヨイ

ヤートナ　ソレヨイヨイヨイ

若い夫と中年の妻が殺意をこめて老婆の方へ動こうとすると、それより早く、中年の夫が老婆にせまる。

中年の夫　お母さん。

老婆　……わかってる。私を殺したくなった……。そうでしょう？

中年の夫　……（老婆にせまる）

老婆　……。それもいいと思うわ。……そうしなさい。……母親殺し。それでひとつ、あなたに根ができ

る。いずれ花の咲く、根がひとつ。……よろこんで、あたし。……さあ、殺しなさい。……わが子の手にかかって死ぬ、そして愛するわが子のこやしになって、土の中で腐って行く。……ねがってもない、しあわせ。そう、それが本当のしあわせ。さあ、……殺して。……はやく、……（かすかに）ころして。

中年の夫　……（老婆の首をしめて行く）

中年の妻　あなた。

若い夫
若い妻　おとうさん。

音楽がひびき、一瞬闇となり、そして、一人の老人が浮かび上がる。

老人　わたくし、三日前に、ある老女の死をみとりました。老女は、死ぬ前に私をむかしの恋人と思いこみ、その間に出来た子について、長い物語をきかせてくれました。……私は、それを聞いているうちに、本当に、老女のむかしの恋人のような気がしてきました。……わたくし、云いのこされた所番地を探し、この近くにくると、老女がくりかえし云っていたれんぎょうの花が庭に咲き、生垣越しに、男女四人の姿が見え、この家族だと、心に感じました。世間に通用するいわゆる証拠というものは何もありません。しかし、老女が私に云いのこした家は、このうちだと確信します。……老女に遺品はありません。遺言もありません。老女の死をつたえたいと思い立ったのも、私の意志によるもので、老女は唯家族のまことのしあわせを祈ると、そう云って死んでゆきました。……わたくし、そのとき、老女の冥福を祈るために、老女の生涯と共に、老女とほぼ同年であるわたくしの生涯もつたえるべく、家族を訪ねる決心をした次第で

す。……わたくし、明治四十一年に生れまして、数え年十八のときに海軍兵学校に入校し、卒業して少尉候補生となり、戦艦長門に乗り組み、昭和十七年に、戦艦大和の砲術副長を命ぜられました。そして、大和は、昭和二十年四月七日、徳之島沖にて沈没……海に投げ出された私は、……そう、あの海を泳いでいた地獄の記憶と、海の藻屑となった三千有余人の戦友の、ひとりひとりのことを、まず家族につたえたいと思います。そのなかには、死せる老女、綾菊から、トラック島にて慰安された士官も、多数……。……では。

老人、歩き去る。
同時に家族四人がうかぶ。老婆は消えている。
中年の夫がおぼつかない足どりで動く。

中年の妻　（かすかに）あなた。
中年の夫　……トキエ。ヨシオ。カズ子。……トキエ、ヨシオ、カズ子。……みんな、ちゃんといるんだろうね。
中年の妻　（夫に寄り添って）ええ、いるわよ？　あなたのそばにみんないるわよ。
若い夫　お父さんは？　ちゃんといる？
中年の夫　ああ、いるとも。
若い夫　どこに？
若い妻　夢のそとに？

このとき、「今晩は」という老人の声がきこえる。

中年の妻　……あなた。

中年の夫　……

老人の声　ごめんください。

中年の夫　……おれが出る。……おれ一人で会う。

中年の妻　……いいえ。私も会うわ。

若い夫　ぼくも。

若い妻　私も。

中年の夫　……（三人を親わしげに見まわし、そして戸口の方を見つめる）

家族たちは、お互い、立ち迷うように、しかし、家族らしく寄り集ってたたずみ、戸口の方を見つめて、じっと待つ……。

――完――

底本：『八木柊一郎戯曲集　第2巻』
白水社
1992年5月10日印刷
1992年5月28日初版